



足場板の荷卸しをする荒川和也さん

もう刑に
服してきている
わけですから。
大きな気持ちでね

元受刑者や執行猶予中の人を
その罪の内容も回数も、年齢も問わず、
雇用し続けてきた会社が、札幌にある。
その数、五〇〇名以上。
障害者も積極的に雇用する
北洋建設株式会社は、四三年間、
「来る者拒まず、去る者追わず」の姿勢を、
自然体で貫いている。

今日も車いすで、全国各地へ

「次は、茨城に行きます。四月は三重に、長崎は今年の三月に行って、去年の九月には佐世保に行きました」。

なんの話かと思えば、すべて「刑務所」。元受刑者たちを受け入れているとは聞いていたが、社長自ら刑務所に向いているとは思っていなかった。

流れはこうだ。北洋建設は、法務省による「協力雇用主制度(※1)」と日本財団による「職親(しょくしん)プロジェクト(※2)」に参加している。どちらも、罪を犯した人の就労を支援する制度であり、特に職親プロジェクトでは、受刑者が刑務所を出所する前、服役中に企業と面接をし、就労先を決める。刑務所内で就職面接が行われるため、社長自ら刑務所に出向く、というわけだ。小澤さんは車いすのため、移動も一苦労。一人では不便なので、いつももう一人の社員を連れて二人がかりで面接に行くと言う。

どんな方を採用するんですか、と尋ねると「うちはほとんどみんな受け入れます」という返事。年齢も、犯した罪の種類も関係ない。面接をした人



左が会長の小澤静江さん。右が社長の小澤輝真さん

社長は一級障害者

札幌に、元受刑者や執行猶予中の人をこれまで五〇〇人以上受け入れている会社があるらしい。そこでは、障害者雇用もしているという。どんな会社なんだらうと、連絡をとると「わたしも一級の障害者です」と社長から返事がきた。ますます興味が湧く。

小雨の中、迷いに迷って到着したのは、札幌市白石区にある北洋建設株式会社資材センター。北洋建設は、足場組みや土木工事、解体工事などの業務を行う建設会社。従業員数六〇名のうち、一四名は元受刑者や執行

猶予中の人、五名の障害者も働いている。「社員じゃありませんが、ぼくを入れたら障害者雇用は六人ですね」と代表取締役の小澤輝真さんは、笑いながら言った。小澤さんは、四年前に脊髄小脳変性症を発病。ドラマ『1リツトルの涙』の主人公と同じ病気だ。しゃべり方が少しおかしいと思って、病院を受診したところ、病気が発覚。難病指定されていて、小脳が委縮する進行性の病気で、最重度である身体障害者手帳一種一級。一人で歩くことが難しく、またしゃべりにくくなっているものの、精力的に仕事をこなしている。